

音楽教育における感動体験の必要性

竹 内 由紀子

千葉大学・教育学部

The Importance of Strong Emotional Reactions in Music Education

TAKEUCHI Yukiko

Faculty of Education, Chiba University

音楽科授業において、楽しくわかりやすい指導は大切であるが、子どもたちがより芸術としての音楽を味わい経験出来るように工夫することが必要だ。そのために、段階的かつ継続的な指導を工夫し、子どもの音楽的な基礎能力を伸ばしつつ、感動体験を数多くさせることを忘れてはならない。子ども自身が音楽を価値あるものと認識することで、音楽に対する憧れを持ち、美しいものを美しいと感じ、さらに美しさを追求する感性を育む土台をつくることが出来る。本論文では、現場での経験の視点と、教員養成の視点から、教師の指導の工夫の手立てと、音楽の授業におけるピアノ伴奏や演奏について述べたい。

キーワード：小学校音楽 (Music Vocal Training),

小学校音楽科教育法 (Music Vocal Training in Elementary School),

音楽科教育法 (Teaching method for Music Education), ピアノ実技 (Piano Practical),

即興演奏 (Musical improvisation)

1. はじめに

1.

音楽を聴いたり演奏したりして、感動する、という体験を筆者は何度もしている。音楽を聴く、という行為に関しては、自分の好きな旋律、美しい旋律や音色、ハーモニーが作り出す響き等で感動する、ということがある。自ら演奏する時は、独奏に関しては、自分の求める理想とした演奏が少しでも奏でられた時、アンサンブルに関しては、互いの息や、ちょうどよく感じる速度、曲想に関する解釈等を、その場で感じながら、しっかりと寄り添ったり合わさったりすることが出来た時に、感動することがある。また、即興演奏の場合、決まったフレーズを演奏するわけではないので、その場で旋律をつくり奏でるが、自分が主にイニシアチブをとる際に、他の奏者が息を合わせたり、盛り上がり方に寄り添ってくれたりした時、逆にほかの奏者の演奏に自分が寄り添ったり支えたり出来たと感じた時、それぞれの奏でる旋律や音色が一体となり、非常に心地よく感じる。それらは、言葉に頼らない、音楽が持つ非言語コミュニケーションの力が作用している時だと考える。このような感動体験は、もっと多くの音楽を聴き、さらに知識を深めていきたいという意欲や、もっと技術を向上させたいという意欲につながっていると考えられる。

2.

現在の小中学校で行われる音楽の授業では、学習指導要領の教科の目標「音楽活動の楽しさを体験することを

通して～」とある通り、子どもたちが興味を引きやすい楽しい活動を行わせていることは多く見受けられる。特に小学校の教員は様々な活動や指導方法を工夫し、子どもに飽きさせない授業を行っている。しかし、子どもを楽しませることが目的となり、本来の芸術としての音楽を味わわせることをどれだけ出来ているか、ということについては疑問が残る。楽しい授業、わかりやすい授業を、子どもたちが音楽に親しむ態度を養うための入り口とし、さらに音楽の本質的なよさを味わったり経験したり出来る授業をしていくことが大切ではないか。

そのために、音楽の授業の中で、数多くの感動体験をさせることが、学習への意欲や、音楽への憧れを持たせることや、技術を向上させたいという欲求につながると考える。子ども自身が音楽を価値あるものと認識することで、音楽に対する憧れを持ったり、美しいものを美しいと感じられたり、さらに美しさを追求しようとしたりする感性を育む土台をつくることが出来るだろう。そのために、音楽が持つ、非言語コミュニケーションの力は非常に重要で、子どもたちに身に付けさせたり、体感させたりするべきものであると考える。音楽を聴いたり、演奏したりすることで感動するという体験を積み重ねることが、音楽への憧れや、さらに技術を向上させたいという思いにつながるのである。

3.

そこで、本論文では、子どもたちに感動体験をさせられるための手立てについて述べていきたい。

感動体験をさせるには、音楽的な基礎能力の向上が必要不可欠である。そもそも楽譜が読めず、耳で聴いて覚えたことを歌ったり演奏したりする、というのは、どの

連絡先著者：竹内由紀子 yk-takeuchi@chiba-u.jp

ように演奏するかについて思いを持ったり、自ら表現の工夫を考えたりすることが難しい。楽譜から読み取れることを分析し、それまでの経験を生かして表現の工夫が考えられるようになるために、どの子も読譜力を身に付けることが大事になってくる。しかし、今の教育現場では、授業時数が少なく、音楽の授業が週に一度しかない、または学校行事等で一度もない、ということがあり、音楽の基礎能力の積み重ねをすることが現実的に難しい。今後、朝の学習等短い時間で行われている算数ドリルや国語ドリルのように、個人で進められる音楽ドリル等の開発を進めていきたいと考えている。毎時間の授業でも楽典に触れ、少しでも子どもの能力を積み重ねられるように工夫出来るようにする必要がある。

今回は、筆者の小学校での指導の経験から、指導方法に関する工夫の仕方と、ピアノ伴奏に関する実践方法について述べる。

Ⅱ 指導方法の工夫

1.

毎時間の授業の中で、子どもが感動体験を味わえるようにするためには、教師の指導の工夫が必要である。筆者は特命教諭として、千葉大学教育学部附属小学校で、音楽の授業を参観させていただいたり、実際に授業をさせていただいたりする機会があった。さらに、筆者が参観した時期はちょうど学部の子生たちが教育実習として附属小学校でお世話になる時期と重なっていたため、実習生への指導も行うことが出来た。さらに、筆者の一年半という期間による公立小学校での音楽専科としての勤務の経験と、大学の講義である「小学校音楽」「小学校音楽科教育法」での大学1・2年生への指導の経験も加え、様々な視点から気付いたことを記しておきたい。

2.

まずは、新しい曲との出会いを大切にするための導入を工夫することが重要だ。学習する曲について、なんのために今学ぶのか、ということがわからなかったり、興味を持ったりすることが出来ないと、とたんに学習への意欲がなくなってしまう。教師側は、子どもの実態を正確に捉え、今養われている技能や知識等、まだ育まれていない技能や知識等を分析することが重要だ。それらの実態から、適切な教材選択をし、教材分析を十分に行うことが大切である。教師自身がその教材を使って何を学ばせたいのか、ということ意識することで、授業の流れや進め方、意識しなければならない指導項目がはっきりし、わかりやすく興味深い授業につながると考える。授業がわかりやすければ、子どもは興味を持ち、学びを深めることができるだろう。

導入の工夫には様々な方法が考えられるが、季節・行事・地域・生活等に関わる楽曲を選択する、既習の楽曲と比較する、歌唱と器楽等の表現領域内で関連付ける、または表現と鑑賞領域を関連付ける等が挙げられる。そこで一番大切なのは、出来るだけ教師が生で範唱・範奏することだ。現在の小学校の音楽科の授業では、便利であるという理由で指導用CDがよく使われている。音楽

専科が受け持つことが少ない低学年の音楽の授業を、音楽が得意ではない担任が受け持つ際に、指導用CDを多用していることもあるが、音楽を専門に学んできたはずの音楽専科ですらCDを多用することもある。もちろん、合唱や合奏の範唱・範奏を鑑賞させたり、オーケストラ等実際に生演奏を聴かせることが難しいものを鑑賞させたりする際は、教師が音源を吟味した上で、最適な音源を聴かせる、ということが必要ではある。しかし、小学校教科書教材を、教材研究の時間を惜しんで練習をせず、教師自ら歌ったり演奏したりしない、ということは罷り通ってよいのだろうか。実際に参観した授業の際も、範唱CDを聴かせた場合と、教師自ら範唱したものを聴かせた場合とでは、子どもの集中力や楽曲への気付き、その後の練習に対する意欲等は、比べるまでもなく生演奏のほうがよかった。これは、記録された音源を一方的に受け取るよりも、その場で演奏する音を直接聴覚で捉えたり、演奏の姿を視覚で捉えたりすることで、能動的に鑑賞出来るからだろう。生演奏での範唱を聴いた子どもたちは、その後、子ども自身は教師の真似をしているとしか考えていないだろうが、頭声発声での発声を行うことが出来たり、特徴的なフレーズをすぐに覚えて歌ったりすることが出来たりしていた。また、姿勢や表情、口の開け方等もよく見ており、それを真似する子もいた。範奏に関しては、実習生による初めての授業のため、緊張のせいでリコーダー演奏による範奏が止まってしまう場面もあったが、それでも子どもたちはよく聴いていたように見受けられた。本来ならば、範唱・範奏は手本となるものでなくてはならないが、生演奏が子どもたちにもたやす力は大きいということがわかる。そのため、教師は時間の許す限り練習を積み重ね、子どもの前では範唱・範奏をするべきである。

3.

楽曲の練習については、まずは教科書歌唱教材の移調の必要性について記述しておく。現在の教科書に載っている歌唱教材の多くは、頭声発声での歌唱が難しい中音域を中心とした楽曲が多く、そのままの調で歌うと子どもたちはどうしても地声と呼ばれる声で歌ってしまう。教師からは「元気に!」や「大きな声で!」と、音量を上げることのみを多く要求されるため、頭声発声で出づらい中音域を怒鳴り声に近い声で歌うということが多い。学習指導要領には、「自然で無理のない声」としか記述されていないため、現場の教師は子どもらしい声、明るく元気な声ならよい、としてしまうことが多く見受けられる。しかし、声を響き合わせるためにはそのような声では美しく溶け合う響きが生まれず、結局頭声発声を指導せざるを得ない状況になる。ところが、教科書教材として合唱曲が掲載されているのは4学年からであり、その頃には低学年から地声で歌うという声の出し方に慣れてしまっており、頭声発声にシフトさせていくのが非常に難しい。そこで、低学年のうちから頭声発声を身に付けさせることが出来るよう、教材を移調して指導していくことが望ましい。筆者の経験からも、低学年で高音域が出づらいということは決してなく、むしろ声の真似がしやすい低学年の方が頭声発声を指導しやすいと考える。

4.

授業については、教師側は多くのことを一度にやらせようとはせず、子どもの様子をよく観察しながら行うようにする。一度の指示であれもこれもと欲張ってしまうと、結局何も出来なくなってしまうし、目的もなくなただ闇雲に繰り返し練習させられるのは意欲が低下してしまう。今は何に気を付けるべきか、ということを確認に指摘し、出来たら次の課題を与える、というような、スモールステップでの練習を心掛けるとよいだろう。

歌唱活動に関しては、まずは練習するフレーズの教師の範唱を聴かせる。その際は音程やリズム等を正確に表現し、頭声発声に気を付けることが大切だ。音程を視覚的にも捉えさせるため、歌いながら音の高さを掌の位置で示す、というのも有効であった。一度の範唱でわかりにくそうなら何度か歌って聴かせ、模唱させる。子どもが歌う際は、子供の音程のガイドラインとしてオルガンで演奏するのが好ましい。少人数の学級での練習では、ピアノの音でも十分に聴こえるが、大人数の学級では、ピアノの音だと減衰してしまい、子どもたちの声が混じって聴こえづらくわかりにくくなってしまうため、同じ音量で持続するような音色を選択して音取りをするのがよいだろう。

音取りがある程度出来るようになった段階では、教師はメロディーとベース、あるいはベースだけを弾き、音楽の流れに乗って歌えるようにしていく。様子を見て速度を上げて歌わせたり、音程やリズムが曖昧なところを練習させたりしていく。

常に子どもの様子を観察しながら、丁寧に、かつテンポよく行い、活動の後には一言ずつ教師の評価を入れる。今出来ていることを具体的に褒め、出来ていないところを指摘し、練習を進めるようにする。さらに、子ども自身も自ら評価出来る場面を設け、歌えるようになった、響きを感じられるようになった等と、自分自身の成長に気付いたり、歌えるようになることの楽しさを見いだしたり出来るようにしていく。子どもは、歌えるようになると楽しい、逆に曲がわからない、歌い方がわからないから楽しくない、という心情を持っているので、少しずつ出来ることを増やしていけるよう、小さな目標を掲げながら指導することを心掛けたい。さらに、以前より出来るようになったことは見逃さないようにし、すぐに褒めることも大事だ。

5.

生徒指導の面からも工夫することが出来る。声を出す、声で表現する、ということは、自分が周りからどう思われているか、どう評価されているか、ということが気になりだす年代にとっては、少し勇気のいることだろう。自分の声が笑われてしまったらどうしよう、周りのみんなと違う声（音色でも音程でも）が出てしまったらどうしよう、と非常に不安になってしまうようだ。子どもたちが不安なく声を出せるような環境を作るために、教師の声掛けや心構えはとても大切である。さらに、高学年以降の子どもの中には、そのような不安から、歌うこと、あるいは声を出すこと自体に苦手意識を持ってしまうこともある。一度苦手意識を持ってしまった子どもにもう

一度歌うことの楽しさを実感させるには、根気強く子供と向き合い、時間をかけることが必要である。そのような苦手意識を持ってしまう前に、歌うことの楽しさや喜びを伝えられるようにすることや、特に声を出すことや教師の真似を苦なくできる低学年のうちから、歌う声と話す声は違うということや、頭声発声での歌唱の仕方を覚えさせることが必要であると考えられる。

さらに、振り返る時間を適宜設け、自分たちの演奏がこんなに変わったという変容を実感させ、子ども自身も評価出来る機会を設けることも大切だ。

このように、段階的、かつ継続的な指導を行い、子供の音楽的な基礎能力を高めていけるような指導の工夫が必要である。

Ⅲ. ピアノ伴奏

1.

さらに子どもの歌唱力を伸ばしたり、音楽性を高めたりする上で、伴奏の力は欠かせないと考えられる。和音を味わって演奏したり、子どもの歌いやすい速度での演奏を心掛けたりしなければならない。

音楽は一方通行ではなく、双方のコミュニケーションによって成り立つものである。音楽科の授業では、歌唱する児童と伴奏する教師が音楽を通して関わり合うことにより、音楽をする上で欠かせない非言語コミュニケーションが生まれる。

しかし、音楽を指導する教師全員がピアノを得意としているということはない。ピアノが苦手な教師でも、十分に楽曲を分析し、理解すれば、楽譜通りの完璧な伴奏をする必要はないだろう。むしろ、楽譜通りに間違えないように演奏する、ということにばかり気を取られ、肝心な子どもの声を聴けなくなってしまう、というのでは本末転倒である。教師自身が歌を得意としているならば、範唱が一番効果的だろうし、ギターが得意な教師は、コード譜で弾きやすい演奏をする、というのもよい。また、コード譜が読めるようになれば、ベースだけを演奏したり、自分なりにアレンジをして伴奏したりすることも出来るようになる。いずれにせよ、楽譜通り伴奏することを目指すのではなく、音楽の流れを意識し、余裕をもって子どもの声を聴けるような伴奏を目指すことが大切だ。

2.

コード譜は、ピアノが苦手な教師にとっても、得意な教師にとっても便利なものである。実用方法を以下に記していきたい。

コードの成り立ちは、まず基本的には三和音から出来ている。大文字のアルファベット、右側に小文字、その右側に数字、その上に数字、という形で出来ている。まず最初の大文字のアルファベットがルート音と呼ばれる、和音の一番基準となる音である。この大文字のアルファベットは英語表記の音名となるため、ピアノが苦手な教師は、アルファベットに注目することで、ベースを演奏することが出来る。左手でベース音を持続させながら演奏し、メロディーを歌唱するという方法で指導を進めることが出来るので、コード譜を読めるようになると伴奏

にも余裕が生まれる。練習方法は、コード譜を見ながら、全音符でルート音を伸ばすのがよいだろう。拍子を感じながら、小節の頭やコードが変わるところでタイミングよくベースを演奏することが出来るようにするとよい。さらに、大文字の横に小文字のアルファベットがついている場合は、三和音がどの種類なのかを判別することが出来る。大文字だけで何もついていない場合は長三和音、小文字でmがついている場合は短三和音、augは増三和音、dimは減三和音である。音を聴き取ってどの三和音なのか理解出来たり、コードを見て構成音がわかるようになったり出来るようにすると、楽曲分析や教材研究にも役立つだろう。

3.

次に、音楽が得意な教師にとっては、コード譜をみて自分なりの伴奏や演奏が出来るようになると、指導や演奏の幅や広がるというメリットがある。

前述した、ベースのみで伴奏をつける練習が出来たら、今度はルート音と5度の音を弾く、という練習が効率的だ。様々なコードがあるが、多くのコードは完全5度の音程が含まれている。コードを見て瞬時にルート音と5度を演奏する、という訓練をすることで、コード譜に慣れるようにする。

また、トップノートと呼ばれる一番高い音を自然な流れでつながられるように演奏する。トップノートに高い音や低い音が入り混じってしまうと、聴いている側にとっても奇妙な音楽になってしまう。旋律感や和音感を考えながら演奏することで、自然の流れに乗った音楽になる。

続いて、長三和音の練習は、基本形、転回形、ルート音と3度、ルート音と5度、3度のみ等と、様々な組み合わせで練習する。コードをおさえるときは、必ずしも基本形のみというわけではなく、音のつながりを感じて演奏したり、よく響き合う音の数や使い方を選択したりする必要がある。コードだけでもより美しい音楽を奏でられるようによく聴きながら練習していく。その際、右手だけの練習だけでなく、弾き歌いをする状況を想定しながら、右手でコード、左手でルート音（ベース音）を奏でるという練習も有効だろう。弾き歌いの場合もトップノートをなるべくつなげられるようにし、さらにリズムの変奏や分散和音を使って様々な伴奏形を考え、実際に演奏出来るようにすることもよい。自分の演奏をよく聴き、トップノートの進行に不自然さはないか、おさえるコードの中に無駄な音はないか、よく響き合っているかということを常に考え演奏することで、子どもに伝わる音楽的な演奏が出来るようになるだろう。そのような練習を、短三和音でも行う。

長三和音にルートから短7度を付け足すコードをドミナントセブンスというが、セブンス（七和音）の中でもよく使われるコードである。ドミナントセブンスは、3度と7度の不安定な音が、安定を求めて主和音を導きたがるため、ドミナントの機能を持っている。そのため、長三和音はトニックとしても、サブドミナントとしても、ドミナントとしても機能するが、ドミナントセブンスはドミナントとしてのみの機能となる。そのような機能を理解した上で、右手で基本形、転回形の練習をした後は、

左手でもルート音と7度、右手で3度と7度・左手でルート音など、様々な形で即座におさえられるようにする。

セブンスには、他にも、メジャーセブンスと呼ばれる、長三和音に長7度を足したコードも存在する。このコードにはドミナント機能がないので、長三和音がトニックやサブドミナントの場合にメジャーセブンスを使用することが出来る。また、長7度という音程が鋭い響きを持っているので、緊張感のあるコードである。転回すると長7度の音程は短2度となるので、基本形と転回形による響きの違いも味わえるようにするとよいだろう。両手で演奏する場合は、左手でルート音を演奏し、それ以外の3・5・6・7音を右手で演奏すると、手で作る和音が短三和音の構成音となるので、少し切ない響きにも感じられるだろう。コード譜では長三和音と書かれている箇所でも、その和音の働きを分析することが出来れば、ドミナントセブンスやメジャーセブンスを自分で判断して演奏することが出来、単純な伴奏譜でも美しい和音を彩って演奏することが出来るようになる。

また、短三和音にもセブンスを加えることが出来る。短三和音に短7度を加えたコードがマイナーセブンスであり、このコードは短三和音のコードの時にほぼいつでも代わって使えるコードである。マイナーセブンスの特徴は、左手でルート音を演奏し、右手でそれ以外の構成音を演奏すると、右手で奏でるコードが長三和音と同じ構成音となるため、短三和音に比べ、暖かさを感じられる和音となる。ほかにも、短三和音に長7度を加えるマイナーメジャーセブンスというコードもあるが、このコードは短三和音とマイナーセブンスの間に使うことで、両コードをなめらかに繋げることが出来る。

三和音の種類のひとつに、サスフォーと呼ばれるコードがある。これは、長調か短調を決定する第3音が完全4度の音程となり、調を決定できない不安定さを持つコードだ。第4音は第3音に進みたいという性質を持つので、不安定なサスフォーの響きを楽しみつつ、音が安定に向かうコード進行を理解して演奏出来るようにする。

さらに、洗練された響きになるような、長三和音と長6度のメジャーシックスコード、短三和音と長6度のマイナーシックスコード、長三和音や短三和音に長9度を足したコード、長6度と長9度を足したコードなどにも慣れるようにする。長6度は完全5度と長2度の関係、長9度はルート音や3度と長2度の関係なので、よく響き合う高さに配置する必要がある。特に低音域での長2度は響きが濁ってしまうため、避けるようにする。

セブンスコードの中で、構成音が全て短3度ずつ離れているディミニッシュセブンスは、転回しても短3度の音程であり、同じ構成音で4つのコードが存在することになる。複雑な響きのようではあるが、実際には3種類しかない。ピアノで演奏する際は、転回すると鍵盤に置く手の形が変わってくるので、どの転回形でも演奏出来るよう練習するとよい。また、ドミナントセブンスの上に第9音を乗せ、ルート音を省略するとディミニッシュセブンスになるため、ドミナントとしても活躍させることが出来る。また、ディミニッシュセブンスの次に配置されるコードは、長調にも短調にも進行することが出来るため、転調するときに使用することも出来る。

それぞれのコードの構成音や役割を理解した上で、自分なりにコード譜で演奏したり、さらにアレンジしたり出来るとよい。ドミナントの部分で5度の長三和音やドミナントセブンスを使うだけでなく、分数コードにし、ベースは5度、右手で1度から5度の和音に分割する、サスフォーを使う、2度から5度に分割するなど変化させることが考えられる。小中学校の共通教材等を自分でコード分析をし、新たに伴奏をつけたり、独奏用に編曲したりすることで、教材に対する理解が深まると共に、児童生徒が憧れを持つような演奏・伴奏が出来るだろう。十分に響きを味わいながら教師が演奏することにより、子どもの音楽的な感性を磨くことにも繋がる。そのように響きを味わえる演奏をするためには、ただ単純に教材分析をし、コードを当てはめて演奏すればよいというわけではなく、常に自分の奏でる音をよく聴き、和音が溶け合っているか、響きの中に無駄な音はないか、手の動きに不自然さはないか、ということを考える必要がある。上記に書いたコードの構成音を全て同時に奏でることがよい場合もあるが、左手と右手でどの音を演奏するか、ということはとても重要になってくる。特に左手

が担当する低音部分で多くの構成音を同時に弾くと、非常に濁った和音になってしまい、よい響きとは言えない。しかし、旋律を右手で弾き、左手で伴奏を担当する、という形は市販されている楽譜でもよく見られるパターンではあるので、幼少時からピアノを習っていた教師は、左手で全ての構成音を演奏しようとし、響きの悪い演奏になってしまうことがよくある。右手は旋律だけでなく、他の構成音も担当し、左手は5度やオクターブにすることで、よく響く押さえ方を研究するようにする。

以上のように、コード譜を活用しながら、十分に美しく響く演奏を心掛け、児童生徒に生の演奏のよさを味わわせたり、憧れを持たせたりすることも感動体験をさせるために必要なことである。

参考書目

- | | |
|---------------|----------------------------|
| 文部科学省
育芸術社 | 編『小学校学習指導要領解説 音楽編』
2018 |
| 文部科学省
育芸術社 | 編『中学校学習指導要領解説 音楽編』
2018 |